

■ 安産寺 子安地藏菩薩

■ 聖林寺 十一面観音立像

安産寺 子安地藏菩薩

三重県境に近いところ、宇陀川の流れる谷あいにはかつてお伊勢参りの街道として栄えたと聞く。鉄道が開通したのは昭和初期のことだ。近鉄大阪線を見おろす高台に安産寺がある。本尊は子安地藏菩薩である。身体にまとう衣は朱色を帯び、優美だ。左手は宝珠を持ち、右手は自然に下げている。地藏像としては珍しく杵を履く。

この地藏像は僧侶ではなく、中村地区の住民の手によって守られてきた。地区の集会所でもあるお堂の奥の階段を登ったところに収蔵庫があり、地藏像は



そこに安置されている。地区の人々を見守るかのように、地藏像の視線は堂内に向けられている。

拜む者の目の高さや照明によって、さまざま表情を見せてくれる。それもこの地藏像の魅力のひとつである。天井の照明を消すと、半眼の白目と唇の色が

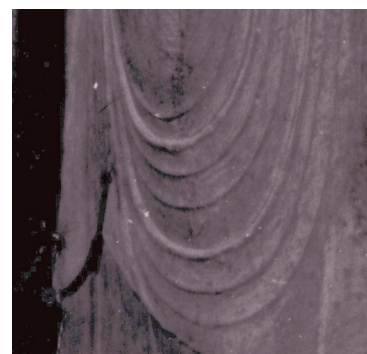
薄暗い収蔵庫の中にくつきりと浮かび上がり、硬質な印象を放つ。次に収蔵庫の外の段差を降りてみる。見上げる地藏像の表情はあどけなさを残し、少し微笑んでいるかのようだ。地藏像の目の下には涙袋のようなふくらみが表現されている。その縦幅が広いため、目の位置が実際よりも顔の下部に位置付いて見える。地藏菩薩の顔が幼く可愛らしく写るのはそのためだろう。

村に伝わる伝承によれば、地藏像は雨の日増水した宇陀川をくだつて来られたという。実際はどのような経緯で安産寺に安置されるようになったのかはわかっていない。ただ、室生寺に由来する像であることは確かかなようだ。安産寺の地藏に見られる衣のひだの表現は「漣波式」と呼ばれ、大きなひだの間に小さなひだを二つ配置するのが特徴だ。(Ⅱ右下写真Ⅱ)これは室生寺金



堂諸像(一部は宝物館に安置)に特有の表現である。また、室生寺には、所蔵されている地藏像と寸法の合わない光背がある。これを安産寺の地藏の背後に置くと、あつらえたかのようにおさまる。

現在、子安地藏菩薩像は重要文化財に指定され、文化庁の了承を得て作られた収蔵庫内に安置されている。一九四〇年に奈良国立博



■ 安産寺 子安地藏菩薩

■ 聖林寺 十一面観音立像

物館で鑑定を受けるまでは、地藏像の足元は子どもたちの遊び場であつたそうだ。トラックが横着けできず、地藏像を荷車に乗せて運んだというエピソードも残る。地区の人々と共に時代を過ごしてきた光景がしのばれる地藏像である。

写真は子安地藏専任保護委員の勝井宏次さんからお借りしました。お父様の勝井松博さんが撮影した写真です。ありがとうございました。

聖林寺十一面観音立像

仏教伝来以来、日本では神仏習合の考えが形成されてきた。東大寺手向山八幡宮のようにお寺を守護する形で置かれた神社もあつたし、神社に付属する形で建てられた神宮寺もあつた。

その一つ、大御輪寺に十一面観音と地藏菩薩が祀られていた。明治新政府が神仏分離令を出して神社における仏教色の排除を求めたのを機に、十一面観音像は聖林寺に、脇侍の地藏菩薩像は法隆寺に移された。現在、大御輪寺は廃寺となり、大直禰子神社として大直禰



子命を祀っている。

菩薩像の中には、右足を少し前に踏み出し、時代が下ると、たなびく雲を模した台座に乗る像もある。これらの動的な表現は、菩薩が衆生を救いに向かう様子を表している。しかし、聖林寺十一面観音像が胸をはって直立する姿は、揺るぎなく頼もしい。どこかへ赴くわけでもなく、誰かを迎えるわけでもなく、佇む。

身体全体が力強い不動の姿勢であるのと対照的に、手は繊細な表情を湛える。おろされた右手の指は、関節を感じさせないほど優雅にしなり、すべて異なる方向を向く。まるで長時間露光写真のように、指先には動きの気配がある。この十一面観音像の指と身体は時間の切り取り方が異なるように思われる。この非対称が様々な人々

を魅了してきたのであろうか。

十一面観音像は、およそ一年間お寺を離れる。現在の収蔵庫が改修され、地震対策が施された新しい収蔵庫が建てられるのだ。工期中は、六月二十二日からは東京国立博物館、来年二月五日からは奈良国立博物館で行われる展覧会「国宝 聖林寺十一面観音―三輪山信仰のみほとけ」に出陳される。かつて三輪山を舞台に、神への信仰と、仏への信仰がどのように結びついていたのかを感じてみたい。

写真はご住職の倉本明佳さんに許可を得て使わせていただきました。ありがとうございました。